



矢田教育差別弾圧裁判の糾弾闘争は、去る六月三日されたように、地裁段階ではじめて、『糾弾権』を法的に認めさせ、部落解放運動の画期的地上平を闘いた。このように、七二年十一月の徳島簡裁判決にひきつづき、『糾弾権』を法的に認めさせたことは、何よりも、六九年三月以来より、日共による部落解放闘争の妨害と敵対の頂点として、解放同盟大阪府

連矢田支部を軸に六年間  
にわたって果敢に闘われ  
てきた成果であり、五〇〇  
余年の解放運動の血の  
にじむような闘いの成果  
である。それは、差別さ  
れ続けていた部落大衆の  
自己解放の闘いが糾弾闘  
争ぬきにはありえないこ  
と、糾弾闘争は、変革の  
ための非妥協な思想闘争  
であり、『糾弾権』はそ  
のための最大の闘いの武  
器であることを社会的に  
認めさせたことである。  
だからこそ、それを『監  
禁罪』として告訴し、差  
別キャンペーンにしがみ  
ついている日共の見地が、  
部落大衆の闘いそのもの  
を圧殺し妨害するだけの  
反動以外のなものでもない  
ことを鮮明にさし示  
した。

訴したことなど、もはや歴然とした事実である。また、「方法や手段程度を越えない限り、とする地裁判決の中に帝ブルジョア権力の政的意図が隠されている。うに、決して國家権力による「糾弾権」を完全に認めるはずがない。それどころか、全く逆に、あの京高裁による10・31差判決(無期懲役)のように露骨な差別と分断の撃をかけてくるのである。それゆえ、彼らの卑劣

や。政治日治によはめこて別東う攻なる。やる。労働者人民よ奪起せよ。この闘いの成果を死守ると共に、その一切の害者や敵対物との闘争一段と強めることぬきは、労働者階級自身の放もありえないことをこに確信するものであく部落完全解放にむけ

完全敗北と、南朝統人民反朴反日救國闘争の一層昂まりは、日帝を否応なし侵略反革命の露骨な展開と向かわせざるえない。海洋博をめぐる沖縄の情勢はそれを象徴している。太子訪冲・慰靈塔参拝、一五朴訪沖（うわさきとしてあれ）として沖縄人との侵略反革命への動員、このための不可欠のものとしての排外主義の流布が進んでいる。そしてそれは、沖縄民への差別分断支配の強化を伴いつつ、災禍による

のに見えた沖繩プロレタリアート人民の闘いは、とりわけ今年に入つて、燃え拡がり、今や、県労協指導部の排外主義的、改良主義的指導を踏みこえて、皇太子沖繩上陸阻止、海洋博粉碎の一歩にむけて、全琉球を闘いの炎でおおいづかんとしている。・

四月末軍実弾射撃訓練実力阻止一四・一九米兵による女子中学生暴行弾打一五・一五沖繩処分糾弾闘争といふ闘いが、本部における統一現闘団の地道な闘いと

皆さん！  
今夏、海洋博粉碎！沖繩で「解放！」の鬨いを、「本土」プロレタリアートの堅固な団結の下に闘い抜かねばならない。七・一七皇太子沖繩上陸阻止、七・二〇日本現地闘争に決起し、日帝の侵略反革命！他民族抑圧に抗し、海洋博粉碎・油糧解放闘争の発展をからづけていかねばならない。

かちとられた“糾弾権”を  
「更なる闘いの武器に

攻撃をとことんまで打ち碎くには、糾弾闘争一階級闘争の発展以外にはどうな道も残されていない。

## 本士勞働者階級の団結

桔子

今日、なだれをうつてこの帝への屈服を開始する部が、かの社共、革マルク沖繩圖争終焉論は言うに及ばず、「本土復帰・奪還派」、「返還粉碎」派の誤認による露呈として、いわゆる「新左翼」の中からさえこの変種を生んでいる。たゞ、怒濤派のように、「海洋博は単なるお祭りだ」とか、あるいは社青同解放派、フロントを中心とするこの部分のよう、「本土に叩き出された沖繩プロを組織する」のが本土プロの任務だ現地に行くのはまちがいだというように、様々ななかで、沖繩「本土」を壁なく、單一の階級闘争、單一のプロレタリア独裁への闘い、そして、沖繩「本土」プロ人民の團結の条件としての沖繩「本土」を貫く單一の沖縄解放団明の建設を否定する反動的思潮、日和見主義者が、この間のわれわれと海洋博・粉碎

沖繩一「本土」実行委をはじめとした沖繩解放闘争の前進、海洋博粉碎、皇太子訪冲阻止へむけての進撃に敵対してきている。かかるに、西一北原一派は、その反動的な部分の兵兵として、これに唱和してきたのだ。彼らは、日帝一日だ。

# 露呈した西一派の右翼組合

更に西一北原一派の誤りと反動性は、この間の海洋博粉碎冲繩一「本土」実行委および海洋博粉碎・天皇・皇太子冲繩上陸阻止冲繩一「本土」（日本）現地共闘における論争の中に如実に現わされており、朴訪冲、賈春鶴光に対する態度を引っぱることを旨とするに武装解除を説いて回り、朴訪冲の前進に水をかけ、足をめぐって、あらゆる闘いに武裝解除を説いて回り、朴訪冲、賈春鶴光に対する態度を公算が強い」「日韓閣僚會議も延期したし、韓国内に非常戒厳令体制下の状況を判断しても、そうだ」とする犯罪的行為を行なつてある。しかし、この言は、単なる失言や失態博期間中における韓国ナショナルデーの設定と韓国人いうレベルの問題ではな

主義振り

本部建  
沖繩解  
のよう  
祥くこ  
い。  
政治・社会全般にわたる民地化」という把握をし、日帝を美化し、「朝鮮の新植民地支配をうなるという把握、微小ブルの危機感を代る立場である。そしてのような小ブルの立場と国家の暴虐性を代る立場である。もつとも、その資本と国家の暴虐性を示していないことから示していいことか然である。もつとも、その拠と克服の条件、主体ではなく、単なるそれが絶望的抵抗、無展望なことを意味であげてゐる。されば、このことを言ふのが、大衆を欺瞞するデマで大衆を欺瞞することに対する呼びかけ、かくして

北原一派の「新植」は、免罪度はいえないと発言したのである。まさにこれは、「被差別化されたものとが立ちあがらない限り(ほほ)」と、行動提起がなかつたのである。まさにこれは、「立ちあがれば(ほほ)」と、彈闘争をしない限り(ほほ)」と、立ちはだかることで、隠べきできなくなると居ながら、あはる」という、この間のT字形の根柢底しである。彈闘争をすれば(ほほ)、闘うべきだけをとる。いよいよ、彈闘争において露呈した反動的本質をまさにこの一連の論文中に、問わず語りに暴いて、闘いの前進に水をかけて回るわけである。その結果、彼らの反動的本質と断固として闘い抜かねばならないとする。彼らの「併合反対」「民衆論」のようないくつかの批判で事足れりしていること自身の中に、彼らの「併合反対」の思想が見えてくる。まさにこれは、「被差別化されたものとが立ちあがらない限り(ほほ)」と、行動提起がなかつたのである。

## 露呈した西一派の 右翼組合

## 右翼組合主義振り

## 御都合主義で揺れ

動く西 北原一派



7月1日発行

# マルクス主義

政治理論機關誌創刊號

- プロレタリア独裁と女性解放(序説)  
——党の綱領的基礎と女性解放——
  - 共産同全国委と党綱領問題  
——党綱領確立へむけて(序)——
  - 総括への序説
  - 組織論確立の為に(I)  
北原イズム=純正サークル主義を粉碎せよ
  - 5・5第9回T糾弾会と我々の進むべき道
  - 声明……共産同全国委(ボルシエビキ)  
声明(在地解放)

# 党の生命を守り抜いたのは誰か

第2号(通卷302号)

◆

## 再び五・五T糾弾会の到達地平について

大島公子

### (1) 「烽火」再建派の諸君の自已保身

五・五第九回T糾弾会で旧同盟(全国委)の崩壊が宣告され、五・一五に我がボルシェビキが誕生して以降、思い出したように、西(八木沢)一北原一派、永井一派が全国委の継承を叫びはじめている。そして旧全国委内で最も動搖し、自らの腐敗と崩壊[破産]を認めながら反動的部品に「党再建」を呼びかけ、我々を逃亡分子として誹謗中傷している。この両派は、表面上多少違った表われ方をしていても、我々に対する立場ではこの一点で奇妙な一致をしており、そのうち、いやもう既に行動の一貫化して、彼らは五・五に至るまで、一体誰が最も眞剣に、日本階級闘争の発展と、その前衛たらんとする党の防衛をしようとしていたのかについて忘れたとでも言うのだろうか? 一体誰が、その困難な闘いから逃亡したのかについて知らぬいとも言うのだろうか?

西一北原一派と永井一派

ない。

女性大衆の非妥協な闘い別への屈服の歴史を断ち切る

別へたかに見えるが、実

彈会以降、いや伊集院一派は、T糾弾会の出発点にお

の逃亡以後、口先で「党の防衛」を唱えながら、實際彼らのやつてきたことのひが準備されていくことをまことに支えられてT糾弾に決起し、三年に及ぶTの女性差

明らかにしなければならぬ。

西一北原一派と永井一派

ない。



# 官僚的警察的独裁かプロレタリア独裁か

を明確な路線として、転換せんとしていた。日本労働  
一層社会排外主義者振りを露わにした日共

一層社會排外主義者振

この年は著『闘争の構造（小説と論議）』を著する

かづ、それが七四秋（七五）春の日帝一政府ブルジョアジーの先制攻撃の下に、どの様な政治的決断を秘めているのか、明きらかにしておかねばならないと考える。何故なら春闘共闘委、総評運動が、その七〇年代戦略を、先に端的に引用した様に、労働運動自身がその総路線を「国民春闘」という全く経済主義的、組合主義的誤りをもつていていたとしても、「体制の変革」「経済政策・政治・社会」の「変革」を明確な路線として、転換せんとしていた、日本労働者階級自身の意志についてある。問われていたのは、「革命的変革」か「改良的変革」かであり、「議会主義」路線によるブルジョア独裁の改革か、「武装蜂起による革命的独裁」か。文字通り、労働運動は、どの様な共産主義（社会主义）路線を結合するのか、どのような政党の下に、自らを組織するのかといった根本的分歧をこそ、明きらかにせねばならなかつたのである。

石油ショック以降の生産と物価の動き(単位%)					
卸売物価指数 (日銀)		消費者物価指数 (総理府統計局)		鉱工業生産指数 (通産省)	
前年比	前月比	前年比	前月比	前年比	前月比
年10月	2.0	20.3	0.4	14.2	18.8
11	3.2	22.3	1.0	—	17.6
12	7.1	29.0	3.6	19.1	12.4
1	5.5	34.0	4.3	23.1	9.2
2	3.9	37.0	3.4	26.3	8.9
3	0.7	35.4	0.7	24.0	4.4
4	0.7	35.7	2.7	24.9	3.3
5	0.6	35.3	0.3	23.1	2.6
6	1.3	35.3	0.5	23.6	— 1.9
7	1.1	34.2	2.0	25.2	— 1.4
8	1.0	32.8	1.0	25.4	— 6.1
9	0.1	30.6	1.6	23.8	— 6.7
10	0.5	28.7	2.3	26.2	— 9.9
11	0.3	25.1	0.7	25.8	—12.4
12	0.2	17.0	0.4	21.9	—14.9
1	-0.4	10.4	0.5	17.4	-18.2
2	-0.5	6.8	0.3	13.9	-18.8
3	-0.2	4.9	1.0	14.2	-16.8
4	0.2	4.3	—	—	—

養父等での逆差別キヤンペー  
ンは、文字通りの社会排  
外主義者振りを露わにして  
いる。この間の「教師聖職  
論」「自治体労働者」「公僕  
論」「国民に支持されるス  
ト」（否定）論にも共通し  
て現われている様に、どの  
様に、労働者階級・人民の  
自然発生性をマルクス・レ  
ーニン主義で武装させ、高  
め上げていくのか、といつ  
た党の立場をかなぐりすて、  
大衆（実は中小企業を中心  
とした小ブル層）の遅れ  
た、帝国主義の支配に屈服  
した意識性を煽動し、その  
上に乗っかり、自らの小ゴ  
ル民主党合政権路線への要  
田獲得「党勢拡大の」点を  
集中している。  
しかし「黒田」は勝利  
た。社会党の「社公民」路  
線の破綻と共に、部落解放  
闘争の勢いに、右翼的に  
つた政治的利用主義は、結  
局のところ、明確な「反黒  
田」の根柢の階級性を何ら  
明きらかにせず、労組内へ  
の介入に対する組合主義的  
反発を、階級的に打ち鋸して  
ることなく、「敗戦」し、  
野党四党の地位に転落して  
いる。

## 公明党の 〈超階級的〉

## 五 章 階級的要請と

一  
四  
章

## 日和見主義の没落

1975年6月25日

沖縄を一基地とCTS・コンビナートと買春観光の島へ人改造成するため、自衛隊宣撫工作が行なわれ右翼反其が海洋博をメドに組織強化し、「日の丸」慰霊祭、皇太子来沖が予定されているのであり、これとの闘いが沖縄解放にとって不可欠であることを、今や多くの革命的人民が確信していることである。

それは、県労協の一昨年来の海洋博反対決議を「机上の決意」とどめるのではなく、現実の沖縄解放闘争として実践してきた、海洋博粉碎沖縄「本土」実行委の統一現闘団の設置（昨年十月以降本部半島で）

全琉、全国の同志姉妹兄弟の皆さん！  
其産同ボルシェビキ沖繩地方委から、皇太子沖繩にて6・23「日の丸」慰靈祭粉砕・韓国人慰靈塔建立阻止の闘いに向けた、決意表明を、五・一五再出発宣言の思想の上にたって明らかにし、我々のかかげてきた海洋博粉砕、沖繩解放の闘いが、全琉を貫き、砂にしみいるように着実に、沖繩階級闘争の深部を搖ふり、変革のエネルギーを引き出していることを明らかにしたい。

去る6月5日、長谷川芳相は、「海外移民の気構えで、「本土」に移住せよ」という、沖繩から、沖縄人をたきだす政策を、発展し、日帝の沖繩支配を一層鮮明に暴露した。そして、海洋博が、日帝の沖繩支配の重点としてあること、それは、「侵略の要塞」の徹

# 沖阻止・海洋博粉碎・沖縄解放の旗の下 沖縄を七月の熱い島と化せ

共産同全國委(ボ)沖縄地方委員会



「我々を熱烈に支持する女性がいるんだ」と西

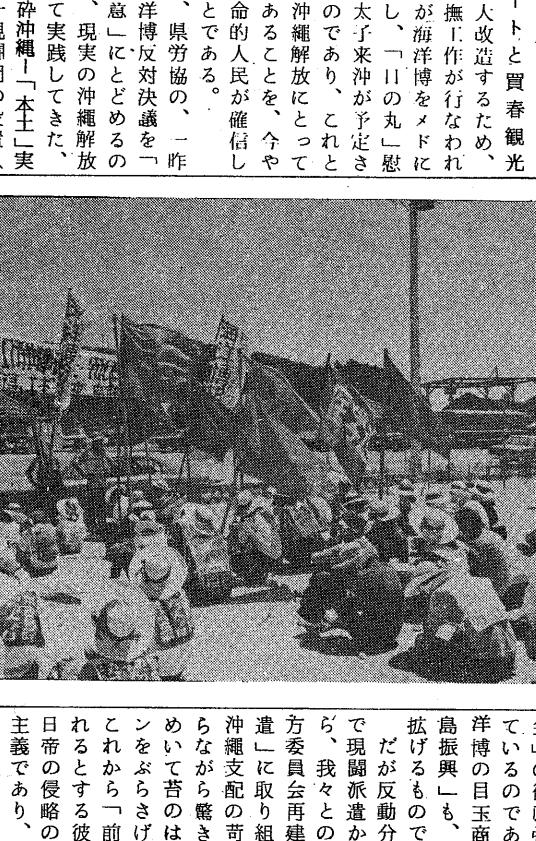
(4) 3・9 中央委からの逃亡分

## 中央委を崩壊させた北原の解党主義

## (5) 病を直すには病源菌を取り除かねばならぬ

沖縄を一基地と C.T.S.・コ  
ンビナートと買春觀光  
の島へ人改造するため、  
自衛隊宣撫工作が行なわれ  
右翼反其が海洋博をメドに  
組織強化し、「日の丸」慰  
靈祭、皇太子来沖が予定さ  
れているのであり、これと  
の闘いが沖縄解放にとって  
不可欠であることを、今や  
多くの革命的人民が確信し  
ていることである。

それは、県労協の、一昨  
年來の海洋博反対決議を「  
机上の決意」ととどめるの  
ではなく、現実の沖縄解放  
闘争として実践してきた、  
海洋博粉碎沖縄!「本土」實  
行委の統一現闘団の設置(  
昨年十月以降本部半島で)



会」の徹底強化が今進行しているのである。ポスト海島振興」も、それを全疏に抜けるものである。

だが反動分子共は、今まで現闘派遣から逃亡しながら、我々との競争上、「地方委員会再建?」「現闘遣」に取り組んだものの、沖繩支配の苛烈さにいまさらながら驚き、あわてふためいて昔のはえたスローガンをぶらさげてきたのだ。これから「前線基地化」されるとする彼らの見解は、日帝の侵略のみと闘う一国主義であり、日米両軍との闘争という沖縄労働者人民の任務を不适当に低めるもの

社会主義との、即ち国際階級闘争の結節環であり、サンフランシスコ日米安保条約以来、とりわけ日韓各約（六五年）以降の、日帝の朝鮮南部への新植民地的侵略以降は、一貫して日本帝の前線基地であつたし、五・一五以降、日米韓三軍の共同作戦体制と混成化によつて、その本質をはつきりさせたのであり、更によりさせたのであり、更に「本土島」全体の軍事要塞化、交通・通信・エネルギー・た

しかし我々も彼らと共有していった経済主義、急進主義の毒を体内からしばり出す闘争を、この沖縄解放闘争の闘いの中で、我々に対する沖縄ブロタリアートから人民からの期待と批判を、大勢い沖縄「本土」ブロタリアートの団結の形成の中に、物質化させていかなければならぬ。

であり、本質的にフォードは外交上の新たな安保（沖縄「返還」協定）強化への日和見主義である。彼らは更に、「朴来沖はありえない」「賈春觀光については、何もいえない」、あるいは「沖解同は、在『本土』沖繩人の組織である」と、沖繩共同（準）本部の沖縄における一年半の実践を踏みつけ、沖解同建設に敵対する等、次々に口を開けば、反動的馬脚をあらわし、革命的プロレタリアート人民の笑を、

元内闘争の関係で」と言つてゐるそなうだが、事実は、田吉からお母ちゃんが急に来られたということであり、何の連絡もしないでサポートか、自分のやつたことの重みをアピールしているにすぎないのだ。どうして、二・一九それを追及されて以降、関西の事務所から姿を消し、この直前から、陸軍担当と電通担当を排除して関西地方委を開催し、西日本地方委は、実質、反動化に陥ったのである。

そして唯一、T糾弾闘争の中書記女性会議=全党女査である。

「我々を熱烈に  
いるんだ」と西  
二・二第六回糾弾会、  
議長八木沢、前査問委員長  
水井の出席が確認された。  
査問委からの放逐し全党  
女性会議と糾弾会と連な  
る闘いによって、政治局の  
破産が明白となるや、八木  
沢は「自分のマルクス主義  
はまちがっていた」と言つ  
て二・一〇前後に逃亡をし、  
北原は「もう一度、一から  
マルクス主義を勉強しなお  
。」と発言して、十月中旬  
姿の破産を宣言した。十月  
中央委で八木沢一北原によ  
つて議長更迭された永井  
は、二月中旬、何の総括も  
指針もなく、××機関反北  
原派と野合してフラクシ  
ンを組織した。

関西地方委指導部は、二  
・一七西が海洋博粉碎沖繩  
「本土」実行委準備会発

主義	闘争	反動
共産主義	抗議	暴行
インター・ナショナル	抗議	暴行
第二回大会	抗議	暴行
テーゼ	抗議	暴行
(より)	抗議	暴行
我がボルシェビキの誕生	抗議	暴行
の性格と、その誕生期の大	抗議	暴行
きな任務は、この「根本的	抗議	暴行
な改造と根本的な革新」と	抗議	暴行
は、我々が新左翼の反スタ	抗議	暴行
・マルクス主義の徹底した	抗議	暴行
正揚とマルクス・レーニン	抗議	暴行
とこ	抗議	暴行

支持する女性が  
間委内中央委メンバーによ  
つて、永井派をも巻き込  
んで「①逃亡した議長八  
木沢、政治局員富田の除名  
の中央委女性差別文書の撤  
回」自己批判③十月中央委  
の総括」を議題にした、十  
月以来はじめての中央委が  
三・九に設定、準備され  
た。当時、他ならぬ永井一派は、  
「どんなことがあっても、  
北原はセン滅し、西は放逐  
する」と公言していた。

三・九当日、西一北原一派  
は、××機関員二名、関西  
地方委数名を会場周辺に徘  
徊させ、一旦会場に来てお  
きながら、永井フラクが二  
時間遅れてきたのを見届け  
てからボイコットし、電話  
同門で結婚式で北原が「西が『これ以上  
ひきまわされるのはいやや』  
と言っている。俺には説得  
革新

追があつたのだろうか。で生き  
我々に唯一残された道は原一派  
以外にはなく、「加納  
ノクの政治」としてではもつて  
、加納ノクを止揚し、ならな  
動に墮した旧全国委を止  
義の復権を、文字通り、革命的  
の取らんとする全ボルシ  
キをあげた思想的改造 不可欠  
ある。  
我々は、いまだ未成熟で  
ながらも、この「根本  
と根本的革新」を我  
再造と根本的革新を革新し  
共産同の全歴史を革新し  
日本共産党との党派  
子に帰結させつゝ打倒し  
に至るまで、貫徹させ  
ればならない。このこ  
そ、何よりも一体的に  
だけに

のびんとする西一北  
永井一派と、その  
解体しつくすことを  
物質化していかねば  
まい。  
てのプロレタリアの  
階級的労働運動の根  
換と發展にとつて、  
のものである。「改  
的傾向や『中央派』  
る闘争をつよめるこ  
求するだけでなく、  
争の性格を変えるこ  
求している。』即ち  
上、労働運動内部で  
ヨアジーを擁護する  
意味するこのような  
暴露する必要がある  
なく、さらすべて

北原の解党主には病源菌らないことのみが、T糾弾に決起した女性大衆に、全てのプロレタリヤ人民に応えうる同盟である。北原は今再び、これほどに同盟（全国委）を腐敗させてきたことを自己批判して、兄弟姉妹と共に、その空手形の発券なりに「更ながらあきればて一から出直すはずの北原フラークと西フラークにノラク代表者会議の席喪失より内閣に差し戻す」とする差別議案撤回をしてしまふ。

レタリ組織すなわち  
組織ばかりでなく、労  
合等々のプロレタリア  
ン古い指導者を共産主  
代える」（レーニン）  
の、長期の強大な任務  
々はつく。

姉妹の皆さん！  
に、プロレタリア内部  
食う反動思想を、八木  
スムー北原イズムに対  
し、それとの闘争をそ  
して物質化しよう。そ  
ぞ目的体現者である西一  
派、永井一派との闘  
争を分派闘争の組織化  
していること、及び西一  
派労働者も含めて當  
て、遂に中央委は自力  
で開催する意志のない  
て、遂に中央委は自力  
の総括を為す展望をそ  
して、實質上崩壊した  
ある。



